



以太利日本兩國ノ間ニ締結スル和親通商
 通航條約案
 以太利國皇帝陛下及ヒ
 日本國皇帝陛下ハ兩國間ニ幸ニ存スル所ノ善
 良ナル交際ヲ保持スルヲ共ニ切望シ且可成ハ
 其交際ヲシテ愈々親密ナルニ至ラシメ并ニ一
 ノ新條約ニ執リ兩國間ノ通商ヲ昌盛且堅固ト
 ラシメシテテ希フカ故之カ為メ各其全權委員
 ヲ命シタリ即チ左ノ如シ
 以國皇帝陛下ハ



114
A2513

甲号
伊么性分差出ル分和属

大天
限正
侯十
爵一
年四
寄月
贈



日本國皇帝陛下ハ
該委員ハ各其善良合式ナリ
認メシ全權ヲ交
換セシ後尤ノ條々ヲ約定セリ

第一條

千八百六十六年八月廿五日即チ日本慶應二年
七月十六日江戸ニ於テ以日兩國ノ間ニ調印セ
シ追加條約ニ添加セル稅目并ニ該條約ニ附屬
セル輸入輸出兩稅ニ関スル諸規則及ヒ附録共
ニ廢紙ト做シ且以後更ニ效用ヲ有セザルモノ
タルヲ双方締盟國ノ間ニ約定セリ 故ニ千八
百六十六年八月廿六日（條約類纂ニハ二）江戸ニ
於テ兩國ノ間ニ調印セシ條約中ニ掲載セシ條
款ニシテ通商海關且開港ニ係ルモノモ亦都テ

廢シ且効力ヲ有スルヲ歇止ス

第二條

以國皇帝陛下ハ日本皇帝政府ノ適意ヲ以テ海
關稅及ヒ稅目ヲ設定シ日本諸港ニ於テ外國貿
易ニ関スル規則ヲ造為スルノ特權ヲ承認スル
カ故ニ此條約中ニ付加セル新稅目及ヒ新規則
ヲ允諾セリ 但此新定稅目稅額及ヒ規則ハ此
條約ト同一ノ期限ニシテ且相互ノ協議ヲ經ル
ニ非サレハ變更スルヲ得サルモノナリ

第三條

其他此條約實行ノ后ハ以國政府ハ日本國ニ運
輸スルキ商品ニ輸出稅ヲ課ス課ササルニ由リ
日本國ニ於テ以國ノ為メニ積入ル商品上ニ輸

出税ヲ課セサルヲ約定セリ

第四條

日本沿海通航ヲ管理スルノ權利ハ特ニ日本帝國政府ニ屬シ且該政府ニテ全ク保有スヘシト又方ニテ協議約定セリ

第五條

其他又外國通商ノ為メ開キシ日本ノ一港内ニ來ル所ノ以國商船ハ日本國海關規則ニ照準スル片ハ其欲スル所ノ積荷一カヲ陸揚スルヲ得ヘクシテ其陸揚シ且其積荷目錄中ニ登記セシモ、他ハ如何ナル種類タルヲ論セス諸税ヲ納付セスレテ其船内残留ノ積荷ヲ以テ出港ス、ヲ得ヘキヲ約定ス而シテ該船舶ハ日本ニ

於テ開キシ他ノ一港又ハ諸港ニ通航シ且其諸港ニ於テ其欲スル所ノ積荷一カ又ハ全部ヲ陸揚スルヲ得ヘク且并ニ如何ナル種類ヲ論セス該船舶ニ課スヘキ諸税ハ其積荷陸揚ヲ始メ又ハ其一カヲ陸揚スヘキ第一ノ港ニ於テノミ納付スヘク該船舶通航中停泊セル所ノ他ノ各港ニ於テハ其港ノ慣習ニ從テ要求セル地方税ノミヲ納付スヘキト協議セリ

第六條

第一條ニ掲載セシカ如ク以國皇帝政府ヨリシテ日本國ニ税目海關税及ヒ其他通商規則ニ關スル權利ヲ讓與セシメ由リ日本皇帝政府ハ以國人ノ為メ全國ニ開キ以國人固有ノ名義ヲ以テ

家屋ヲ建築シ不動産ヲ購求シ舖店及ヒ製造所
ヲ開設スルノ自由ヲ以國人ニ付與シ之ヲ概論
スレハ該政府ヨリ日本臣民ノ享有セル所ノ權
利ヲ以國人ニ付與スレ但シ該以國人ハ帝國
ノ民莫刑事ノ裁判推ニ悉皆服從スヘキ者タル
ヘシ

第七條

以國人ニテ此權利ヲ有セント欲スル者ハ以國
公使館ノ紹介ヲ以テ預メ此件ヲ日本政府ニ申
請セサルヘカラズ此申請ニヨリ以テ其日本裁
判ニ服從スルハ充ルトス

第八條

日皇陛下ノ政府ハ其全國内ニ現今實行セ

ル刑法ヲ以國皇帝公使館ニ公然通知シ且後來
ニ至リ生スル所ノ刑法中諸變革及ヒ改正ハ都
テ公使館ニ通知スヘキヲ約セリ但如何ナル
場合ヲ論セス已ニ廢止セシ所ノ拷問ハ決シテ
再行スヘカラサルモノトス

第九條

日本國內ニ家屋ヲ有セル以國人ニ係ル詞訟ハ
民事刑事共以國公使館若クハ領事館附屬訟官
ヲシテ訟廷ニ列席セシムルノ權利ヲ有スヘク
訟訟官ハ裁判中必ラス列席スヘキノ權利ヲ有
シ裁判宣告ハ必ラス此者ノ面前ニ於テ為スヘ
キモノトス

此條款ヲ完全ニ行シ得ヘキカ為メ若以國人

リ如何ナル種タルヲ論セス一ノ重罪又ハ輕
罪ヲ犯セルニ付キ逮捕ニ過ルキハ日本官吏ヨ
リシテ逮捕ノ地ニ接近セル以國公使館又ハ領
事館ニ可成丈速カニ之ヲ報知スヘシ

第十條

帝國內ニ住スル以國人ノ家屋ハ侵凌スヘカラ
ス且現行犯ノ他ハ一ノ公使館認官又ハ屬員ノ
主會アルニ非サレハ日本官吏ハ其家屋内ニ侵
入シ且搜索ノ所為ヲ為スヘカラズ但公使館ニ
於テハ該官吏滋造ヲ決シテ拒マサルナリ

第十一條

以國皇帝陛下ハ外國通商ノ為メ己ニ開キ諸
港於テ檢疫及ヒ警察規則并ニ銃獵及ヒ現今

居留地内警察規則ヲ設定スルノ權利ヲ日本皇
帝政府ニ承認セルカ故ニ以國人該規則ヲ犯セ
シ場合ニ於テハ以國領吏訟廷ハ日本法律ヲ以
テ之ニ與行スルヲ准可ヲ得ルモノトス

第十二條

其他千八百六十六年八月廿八日(二十五年)以
及日本兩國ノ間ニ於テ調印セシ條約中ニ掲載
セシ諸條款ニテ廢止ニ至ラス或ハ又此條約ト
抵觸セサルモノハ以前ノ如ク續テ実行スヘキ
ヲ約定セリ

第十三條

此條約ハ批准交換日ヨリシテ十二年ノ間之
ヲ実行スヘシハ双方締盟國ノ一ヨリ該期限ヨ

リ十二ヶ月前に効力ヲ歇止スルノ志旨ヲ報知
セザル場合ニ於テ双方締結國ノ一ヨリ此條
約ヲ廢スルキヲ公報スルノ日ヨリ起算シ尚ホ
一年ノ間ハ遵守スヘシ

但日本帝國内ニ在留セル以國人ノ權利及ヒ義
務ニ関スル第六條七條八條九條及ヒ十條中ニ
含有セル條款ハ永久常存ノモノト看做スヘリ
且假令此條約ノ期限ヲ經過セシ後ヤリト雖モ
相互ノ協議ニ非サルヨリハ之ヲ廢止シ或ハ又
之ヲ變更スルヲ得ヘカラサルモノトス

第十四條

此條約ハ批准ヲ得ヘキモノニシテ該批准ハ、
ニ於テ可成文ケ速カニ之ヲ交換スヘシ

之ヲ確証スルカ為メ、

乙号

外務省考案寫

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

日本國ト以太利國トノ間ニ現存ノ貿易條
約ヲ改定シ且ツ兩國ノ通商ヲ盛大ナラシ
ムル為ノ約書

日本國皇帝陛下及
以太利國皇帝陛下ニ從來幸ニ兩國間ニ現存セ
ル所ノ親睦ナル交際ヲ維持センコトヲ希望シ且
ツ追加約書ヲ設ケテ庶幾クハ尚一層其交誼ヲ
固フレ兩國間ノ貿易ヲ擴張シ且堅實ナラシメ
シトス其為ノ双方ニ於テ各自ノ全權委員ヲ選
ビ即チ

日本國皇帝陛下ハ、
以太利國皇帝陛下ニ、
命シ右双方ノ全權委員ハ各其委任狀ヲ相示シ

大正十一年四月

双方共其確實正當ナルヲ認メ左ノ各條ヲ約定セリ

第一條

慶應二年七月十六日西曆一千八百六十六年八月十五日江戸ニ於テ兩國ノ全權調印セル追加約書并ニ之ニ附属セル借庫規則輸出入税則及其目錄トモ自今コレヲ廢棄シ無効ノ者ト爲スヘシ又同日即チ一千八百六十六年八月十五日江戸ニ於テ調印セル兩國條約書中港口規則海關其他ノ税則ニ關スル諸條款并ニ一千八百六十六年八月十五日ノ條約ニ附録セル貿易ノ定則モ亦悉皆之ヲ廢止スヘシ且又此約書ヲ實施スルノ時ヨリ以國政府ハ日本政府自カラ海關

其他ノ税額ヲ調理シ日本諸開港ノ外國貿易ニ關スル諸規則ヲ制定スルノ特權ヲ認ムヘシ

第二條

此條約實施ノ后ハ以國政府ハ日本ニ輸出スル以國産出或ハ製造ノ物品ニ決シテ海關税ヲ課セラルヘク又以國ニ輸出スル日本産出或ハ製造ノ物品ニモ亦決シテ輸出税ヲ課セラルヘシ

第三條

一千八百六十六年八月十五日ノ條約第五條及第六條現存スル間ハ右現存條約ノ違反并ニ此約書ニ因リ時々日本政府ニ於テ制定スヘキ海關税則借庫規則港ノ規則沿海貿易規則船積規則ノ違反ニ付日本政府ヨリ没收或ハ罰金ノ要

求ハ然テ以國領事裁判所ニ訴フヘシ而シテ該
裁判官ハ是等ノ訴ヲ一々公正ニ審判シ右條
約及諸規則ノ條款ニ照ラシ之ヲ裁斷スルヲ以
テ自ラ任シ没收品或ハ罰金ハ悉ク之ヲ日本官
負ニ交付スヘシ

第四條

外國貿易ノ為ニ開キタル日本ノ港口ニ到レ
ル以國船舶ハ日本海關ノ法則ニ隨ヒ其載貨ノ
内適意ノ幾分ヲ陸揚シ殘餘ノ分ヲ載セテ出帆
スルヲ得ヘシ但陸揚シテ其事由ヲ載貨目錄ニ
登記セタル分ヲ除クノ外殘餘ノ分ニハ輸入税
其他一切ノ賦税ナカルヘシ又右船舶ハ他ノ日
本開港ノ一所或ハ數所ニ通航シ其殘貨ノ内又

適意ノ幾分ヲ他港ニ陸揚スルヲ得ヘシ然レモ
凡テ船舶ニ對シ賦課スヘキ諸税諸費ハ最初其
積荷ノ幾部分ヲ陸揚スル港ニラヒテノニ拂フ
ヘシ而シテ該船舶其後引續キ航海シテ到ル所
ノ港ニ於テハ其地方港内諸税ノニテ港費ノ為
ニ納ムヘシ

第五條

此約書第一條ニ揭示セル如ク以國政府ハ日本
ノ海關税目海關規則其外諸規則ノ事ニ就テ同
意シタル條件アルヲ以テ其報償トシテ日本政
府ハ左ノ許可ヲ為スヘシ即チ此約書實施ノ日
ヨリ以國人民及船舶居留貿易ノ為メニ更ニ二
港其内一港ハ下ノ開タルヘク又一港ハ後ニ双

方協議ノ上決定スヘシラ開クヘシ

第六條

一千八百六十六年八月廿五日、兩國條約第十
五條ハ最早有要ナラズト認ムルヲ以テ此約書
實施ノ日ヨリ廢棄スヘシ

第七條

日本居住ノ以國人民今後遊歩期程内外ニ於テ
日本政府既ニ制定シ或ハ向後制定スル所ノ地
方警察規則衛生規則銃獵規則道路橋梁修繕規
則舟車馬稅規則燈臺浮標規則水先規則新聞規
則紙幣發行規則日本產物營業規則及此類ノ規
則ニ違犯スル者ハ地方裁判ニ從フヘシ

第八條

日本在住ノ以國人民ハ此約書實施ノ後ハ具本
國人タルヲ公認セル該國公使記名ノ證書ヲ添
テ商業或ハ居住ノ爲メニ内地行ノ願書ヲ日本
政府ニ出サハ日本政府ハ日本國內何處ノ港或
ハ地ナリ且自由ニ其内地行ヲ允許スヘシ右以
國人民ハ具身命及財產トモ權利殊典ノ保護ヲ
受クルト恰モ日本人民ト同様タルヘシ但シ本
條ニ於テ以國人民ニ准許シタル特典ニ由リ具
利益ヲ得タル以國人民ハ日本國內部ニ在ルト
否ラサルトヲ問ハス民事刑事共一切日本ノ裁
判並ニ制度ニ從フヘシ即チ斯ル以國人ハ日本
國公同ノ義務ヲ擔當スヘキト日本人民ニ異ナ
ルトナシ

第九條

從來兩國間ニ結約シタル條約或ハ約書ノ條款
中今茲ニ廢棄ヲ明示セラル者ト雖此約書ノ
條件ニ抵觸スル者ハ悉皆之ヲ廢棄スヘシ且此
約書ハ兩國間現存條約ノ一部分ト見做スヘシ
又此約書及從來兩國間ニ結約シタル條約或ハ
約書ノ條款中今茲ニ廢棄ヲ明示セラル部分ハ
此約書ノ批准交換ノ日ヨリ十年間実行スヘシ
而シテ若シ其期限ヨリ十二ヶ月以前ニ双方ノ
一國ヨリ他ニ公書ヲ贈テ右條約廢止ノ旨ヲ通
知セラルハ尚一ヶ年間双方ニ於テ此ヲ遵守ス
ヘシ而シテ此期限盡クルニ至ラハ此約書先ニ
從來兩國間ニ結約シタル條約及約書ノ當時現

存ノ部分悉皆廢止ニ歸スヘシ

第十條

一千八百六十六年八月十五日ノ條約中第二十
九條ハ是迄ノ如ク有効ノモノタルヘシ但シ以
太利政府ヨリモ日本エ前同様殊典ヲ與フヲ
茲ニ添加ス勿論此殊典ヲ交付スルニアタリ刑
限約束ナキモノハ具取極メナク之ヲ交付シ其
約束ナキモノハ約束ナク之ヲ交付スルヲ茲
ニ約定ス

第十一條

此約書ハ批准ヲ要スルモノトス而シテ本日ヨ
リ十五ヶ月以内成ルハク速ニ東京ニ於テ批准
ヲ交換スヘシ

古ノ証トシテ上文記載ノ右全權委員茲ニ各自
其名ヲ記レ印ヲ鈐ス

年 月 日

日本國ト伊太利國トノ間ニ現存ノ貿易條
約ヲ改定シ且ツ兩國ノ通商ヲ盛大ナラシ
ムル為メノ約書

日本國皇帝陛下及伊太利國皇帝陛下ハ從來幸
ニ兩國間ニ現存セル呼ノ親睦ナル交際ヲ維持
セシメテ希望シ且ツ追加約書ヲ設ケテ庶幾ク
ハ尚一層其交誼ヲ固クシ兩國間ノ貿易ヲ擴張
シ且堅實ナラシメントス其為メ雙方ニ於テ各
自ノ全權委員ヲ選ビ即日本國皇帝陛下ハ
〇〇〇ニ伊太利國ニ帝陛下ハ
〇〇〇ニ命シ右雙方ノ全權委員ハ各其委任狀ヲ相示

レ雙方共其確實正當ナルヲ認メ左ノ各條ヲ約
定セリ

第一條

慶應二年七月十六日西曆一千八百六十六年八
月廿五日江戸ニ於テ兩國ノ全權調印セル追加
約書并ニ之ニ附属セル借庫規則輸出入税則及
其目錄トモ自今コレヲ廢棄シ無効ノ者ト為ス
可シ又同日即一千八百六十六年八月廿五日江
戸ニ於テ調印セル兩國條約書中港口規則海關
其他ノ税則ニ關スル諸條款并ニ一千八百六十
六年八月廿五日ノ條約ニ附録セル貿易ノ定則
モ亦悉皆之ヲ廢止ス可シ且又此約書ヲ實施ス
ルノ時ヨリ伊國政府ハ日本政府自カテ海關其
他ノ税額ヲ調理シ日ハ諸開港ノ外國貿易ニ關
スル諸規則ヲ制定スレノ特權ヲ認ム可シ

第二條

此條約實施ノ后ハ伊國政府ハ日本ニ輸出スル
伊國產出或ハ製造ノ物品ニ決シテ海關稅ヲ課
セサル可ク又伊國ニ輸出スル日本產出或ハ製
造ノ物品ニモ亦決シテ輸出稅ヲ課セサル可シ

第三條

一千八百六十六年八月十五日、條約第五條及第六條現存スル間ハ右現存條約、違反ノ事ニ此約書ニ固リ時々日本政府ニ於テ制定ス可キ海關稅則借庫規則、港口規則、沿海貿易規則、船積規則、違犯ニ付日本政府ヨリ沒收或ハ罰金、要求ハ總テ伊國領事裁判所ニ訴フ可シ而シテ該裁判官ハ是等ノ訴訟ヨリ一々公正ニ審判シ右條約及諸規則ノ條款ニ照ラシ之ヲ裁斷スルヲ以テ自ラ任シ沒收品或ハ罰金ハ悉ク之ヲ日本官負ニ交付ス可シ

日本政府ニ於テ要_ト用_ト認_ルノ時ニ當リ布告
スル檢疫法ニ對テハ伊國政府ニ之ヲ遵奉シ
伊國人民及船舶ハ日本政府ノ制定シ或ハ
制定ス可キ其規則ニ從フヘシ若_シ伊國人民
及船舶右規則ヲ違犯スル_ハ其國
領事ニ告訖シ日本國法ニ依テ之ヲ判決セ
シム可シ

第四條

外國貿易ノ為ニ開キタル日本ノ港口ニ到レル
伊國船舶ハ日本海關ノ法則ニ隨ヒ其載貨ノ以
適意ノ幾分ヲ揚陸シ殘餘ノ分ヲ載セテ出帆スル
ヲ得ヘシ但陸揚シテ其事由ヲ載貨目錄ニ登記
シタル分ヲ除クノ外殘餘ノ分ニハ輸入税其他
一切ノ賦税ナカル可シ又右船舶ハ他ノ日本開
港ノ一所或ハ數所ニ通航シ其殘貨ノ内又適意
ノ幾分ヲ他港ニ揚陸スルヲ得ヘシ然レモ凡テ
船舶ニ對シ賦課スベキ諸稅費ハ最初其積荷ノ
幾部分ヲ陸揚ス港ニシテ之ヲ拂フベシ而シテ該
船舶其後引續キ航海シテ到ル所ノ港ニ於テハ其
地方港内諸稅ノミヲ港費ノ為ニ納ムベシ

但ニ日本國沿海貿易ヲ管理スルノ權ハ日本政
府ノ專有ニ屬スルモノニシテ固ク其保存スル
所タリ可シ

第五條

此約書第一條ニ揭示セル如ク伊國政府ハ日本
ノ海關稅目海關規則其外諸規則ノ事、就テ同
意シタル條件アルヲ以テ其報償トシテ日本政
府ハ左ノ許可ヲ為スコシ即此約書實施ノ日ヨ
リ伊國人民及船舶居留貿易ノ為メニ更ニ二港
其内一港ハ下ノ港タル可ク又一港ハ後ニ双方協議
ノ上決定ス可シヲ關ク可シ

第六條

千八百六十六年八月廿五日ノ兩國條約第十五
條ハ最早有要ナラスト認ムルヲ以テ此約書實施
ノ日ヨリ廢棄スヘシ

第七條

日本居住ノ伊國人民今後遊歩期程内外ニ於テ
日本政府既ニ制定シ或ハ向後制定スル所ノ地
方警察規則衛生規則銃獵規則道路橋梁修繕規
則舟車馬稅規則燈臺浮標規則水先規則新聞規
則紙幣發行規則日本產物營業規則及此類ノ規
則ニ違犯スル者ハ地方裁判ニ從フ可シ

第八條

從來兩國間ニ結約シタル條約或ハ約書ノ條款
中今茲ニ廢棄ヲ明示セサル者ト雖此約書ノ
條件ニ抵觸スル者ハ悉皆之ヲ廢棄ス可シ且此
約書ハ兩國間現存條約ノ一部分ト見做ス可シ
又此約書及從來兩國間ニ結約シタル條約或ハ
約書ノ條款中今茲ニ廢棄ヲ明示セサル部分ハ
此約書ノ批准交換ノ日ヨリ十年間実行ス可シ
而シテ若シ其期限ヨリ十二ヶ月以前ニ双方ノ
一國ヨリ他ニ公書ヲ贈テ右條約廢止ノ旨ヲ通
知セサレハ尚一ケ年間双方ニ於テ此ヲ遵守ス
ヘシ而シテ此期限盡クルニ至ラハ此約書并從
來兩國間ニ結約シタル條約及約書ノ當時現存

ノ部分共悉皆廢止ニ歸ス可シ

第九條

伊國ニ在ル日本臣ノ身付財産貿易航路ノ諸
權利特典ニ與シ法省ノ條約及本約書ニ明約セ
ザルモノト雖モ伊國政府ニ於テ現ニ他ノ外國
人臣ニ許可セシモノ及ニ將來許可スベキモノ
ハ日本臣ニ亦均シク之ヲ享スルベシ
且又今後日本政府ニ於テ聯盟國ノ人臣ニ許ス
所ノ特典ハ伊國人臣ニ均シク之ヲ享スルベシ
トイハレヌヲ許可スルニ特約アルモノハ其特
約ヲ承認シタル上ニテ之ヲ許可スベシ

庚子傳

此物者ハ批推ヲ得スルモノトス知レテ本日ヨ
リ十五ヶ月以内必ル可ク遂ニ東洋ニ於テ批推
ヲ交換ス可シ
右ノ記トシテ上又記載ノ右左推番員表ニ於テ
其表ヲ記シ仰テ終ス

年月日

大藏省

大藏省

